

友史会 2026年2月「講座例会」

## 特別陳列「大和の城郭と考古学」

令和8年2月15日（日）

橿原考古学研究所 講堂

### 【感想文】

3月15日まで開催された令和七年度特別陳列「大和の城郭と考古学」。その講演会「発掘調査で明らかになった大和の城郭」で三人の講師から最新情報をうかがった。

#### ◆十文字健先生（大和郡山市まちづくり戦略課）

「発掘調査から豊臣期の郡山城に迫る」



豊臣秀長の居城として注目を集める郡山城。ここ十年の発掘調査で豊臣政権期、つまり豊臣秀長、秀保、増田長盛が残したものが明らかになった。

興味を引かれたのは、本丸天守などの礎石、二の丸の造成土から出土した金箔瓦。大坂城や聚楽第と同範関係の瓦。百八十面を超える野面積みの石垣には他には例を見ない多数の転用石材。

当初の戦いのための城から、奈良のみならず京や大坂も見据えた統治拠点としての意図がうかがえるそうである。

発掘と並行して、以前の鬱蒼とした林のような様子から、現在私たちが見ている市民が集まる天守台に生まれ変わった。昨年、史跡郡山城跡保存活用計画を策定して推進中である。

折からの大河ドラマのブームで、お仕事が多忙を極め、ドラマはまだ初回しかご覧になっていないとのこと。なお、展覧会「秀長と郡山のあゆみ」を来年一月まで開催中とご紹介があり、機会を見つけて訪れたい。

◆青山航先生（宇陀市教育委員会）

「宇陀松山城跡の発掘調査 ―破城の作法の検討―」



300年弱続いた郡山城に比較してわずか30年で破城の憂き目にあった宇陀松山城。その指揮を取った奉行が自分にとっては作庭でしか馴染みのなかったあの小堀遠州。破城に関する文書が残っているのは珍しいようで、作業を申し付けるつもりだった百姓が労役を嫌って逃げ人手が足りないなど、苦勞した有様を彼が書き残しており興味深い。

発掘調査の結果、石垣の崩し方が角石や城下から見えやすいところはかなり徹底するが、見えない側では残っているなど一様でなかった。天草の乱で拠点となった原城の破城では、裏込石まで崩して粘土で塗りこめるなど徹底的だったが、宇陀松山城では、そこまでは壊されてはいない。

一国一城令に基づいて、一般的に天守閣など建物が破壊されただけと思っていたが、一種の破城の作法に従い、石垣を様々な形で壊されていたのを知ることができた。

ご紹介のあった宇陀市文化会館での展示会「伝建地区を掘る」は2月末で終わっているが機会をとらえて訪問したい。

◆岡田雅彦先生（橿考研調査部調査課）

「織豊期の大和の瓦」



先生は元々古代の瓦がご専門であったが、転じてここ数年は織豊期の瓦を研究されて

いる。

大和には寺社が豊富で瓦職人の仕事が絶えずあり、織豊期直前まで橘氏のように瓦を生業とする職人の系譜が確認できる。大工職として直系血族で名前を受け継ぎ、有力寺院の仕事を一手に引き受けていた。

松永久秀が大和に入り多聞城を構築したのは永禄四年（1561年）。ちょうど、南都の寺社を見下ろす位置。ただし武士が瓦職人を掌握したというより、寺社に資材調達や大工を派遣するように依頼したと考えられる。城郭に使われたのは、寺院から転用した瓦もあれば新たに焼いたものもある。

これは、郡山城に置いても同様である。大坂城と同範の金箔瓦も出土していて、豊臣期の瓦ではとワクワクするが、その前の筒井氏の時代の可能性も捨てきれないとのこと（図録解説）。

大和の職人と、一旦播磨に移住した後やってきて作業した職人とでは、瓦の形が異なっている。天正年間や元和以降と異なり、文禄・慶長年間だけ、城郭の瓦は寺社との間に同範関係が無く、これは慶長大地震による復興作業のため大量に瓦を作ったためと考えられる。安土桃山から江戸初期の瓦においても出土される瓦から様々なことが分かるのは面白かった。

大河ドラマ「豊臣兄弟！」の人気もあってか会場は満員であった。講演いただいた三人の先生に感謝いたします。

東京都 建部周二